

第1回 青山俳壇 受賞作品発表

題字 堀田宣彌理事長

テーマ「夏の句」 最優秀賞

第1回「青山俳壇」の受賞作品が次のとおり決定いたしました。受賞者の皆様、おめでとうございます。初等部生から大学生、校友、教職員、学院関係者など1575名の方々よりご応募いただきました。たくさんのご応募、誠にありがとうございました。

ひんやりとうみのおいのスイカかな

初等部1年 ■ 田島 心美

わたしははじめてはいくをつくりました。すいかがだいすきなのですいかのはいくをつくりました。おねえちゃんたたえたすいかはひんやりしてあまくて、うみのおいがありました。とってもおいしかったので、そのきもちをはいくにしました。

選者
大屋 多詠子

実は、西瓜は秋の季語なのですが、夏の季節感がよく伝わります。海水で冷やした西瓜でしよるか。少し潮の香りを感じながら食べる西瓜は冷えていて、甘くみずみずしかったのでしよう。

思い出をよみがえらせるせみの声

初等部4年 ■ 立石 二瑚

私が、茨城県にいた時の夏、なれない通学路の一本道を双子の弟と静かに歩いていると、せみのミン、ミンという声だけが林の中でひびいていました。夏にせみがなっているのを聞くとその時の思い出がよみがえってくるので、それをこの俳句に表現しました。

選者
林 謙二

「せみの声」は夏の到来や暑苦しさを感じさせます。しかし、作者は思い出がよみがえったのです。ふだん聞き流してしまいうせみの声から、きつと素敵なことを思い出したのでしよう。

秋近し心に錨下ろさねば

中等部1年 ■ 木佐貫 謙

この俳句は、例年の夏休みの最後の方のことを思い浮かべながら作りました。のんびりした夏休みからまた新学期が始まり心を切りかえなければということを詠んだものです。受賞を聞いた時はとても驚きましたが、とても嬉しかったです。

選者
權 未知子

具体性はあまりありませんが、夏の終わりの作者の覚悟というか、決意が感じられました。句の持つ静けさが素敵です。

ベランダで涼風を待つ家族の夜

中等部3年 ■ 大西 真恋

夏休みに父と久しぶりに祖母の家に行きました。祖母の家は私の家より比較的涼しいところがあるので、夜は涼しくなるかと思ったけれど暑かったので、祖母と父とベランダで涼しい風が来て欲しいと願って風を待っていた時の気持ちを詠みました。

選者
片山 由美子

昔なら庭に出て縁台で夕涼みというところですが、ベランダが現代の住まいの家族の生活を思わせます。部屋の中でエアコンをつけて暑さをしのぐのとは違う涼しさでしょう。

二年間しまわれているサングラス

大学経済学部准教授 ■ 佐竹 由帆

授業内活動で英語俳句を作ることがあり、元々の日本の俳句への理解を深める必要を感じて三年ほど前から俳句を始めました。掲出句は、感染症及び年齢のせいで夏らしいことをしばらくしていない状況を表現したいと思って作りました。受賞、誠に光栄に存じます。

選者
片山 由美子

出番がなくなったサングラス。昨今なら新型コロナウイルスの感染が拡大している夏を思うでしょうが、年齢と共に生活の変化が起きたことも考えられ、普遍性のある作品になっています。

理事長賞

汗 滲む額を拭い球を追う

大学院理工学研究科1年 ■ 山崎 裕之

選者 堀田 宣彌

炎天下での野球の応援です。最^{ひい}肩のチームが打ったボール、ホームランとなれと願って球を追った。残念ながらファウルでした。ガッカリ額の汗を拭うのも忘れていた。急に汗が流れだした。ホームランなら嬉しくて汗を拭く間もなく喜び飛び跳ねて、額の汗は気にならなかったでしょう。

院長賞

蝉時雨宿題急かす母の声

初等部5年 ■ 上杉 航太郎

選者 山本 与志春

夏休みが終わりに近づいても終わっていない宿題。心配する母の声が、喧^{けん}噪な蝉時雨のように感じられた作者の気持ちがよく伝わってきます。しかし、おかげで素敵な俳句が詠^{けん}めました。

初等部長賞

じりじりとぼくまでやけるせみのこえ

初等部3年 ■ 尾崎 一樹

選者 中村 貞雄

アブラゼミでしょうか、ミンミンゼミでしょうか。夏の一ページを想い出させる一句です。なぜか昔の自分を見ているかのような、誰でも持っている原風景の作品です。

目の前にそびえ立つ雲夏が来た

初等部6年 ■ 江藤 奈那

選者 中村 貞雄

まぶしい太陽と真っ青な空に現れた入道雲。きつと見る間に大きく成長した雲なのでしょう。「そびえ立つ」という言葉が、いかにもギラギラとした夏を象徴しています。

中等部長賞

父が持つ赤みがかったサングラス

中等部2年 ■ 松田 蒼士

選者 上野 亮

父が愛用している黒い部分が少し劣化し赤みがかったサングラス。自分の知らない父の様々な夏の思い出も見て来たのだろうか、と想像の翼を広げるさまを感じる一句でした。

足早に部活帰りのかき氷

中等部3年 ■ 稲垣 貴紀

選者 上野 亮

夏の暑い日、部活帰りにみんなで近所のお店で食べたかき氷、最高だったな、と高校時代の記憶がよみがえる一句でした。コロナ禍以前、中等部のカフェテリアでも見られた光景でしたが……。

高等部長賞

該当作なし

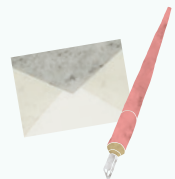
大学長賞

花火見る君の横顔盗み見る

大学理工学部化学・生命科学科4年 ■ 藤代 芽衣

選者 阪本 浩

青春の一ページ、夏の思い出……その一瞬をとらえた秀作だと思います。どのような物語の一コマなのか想像したくなります。しかし、これをバンデミックという状況の中で見るなら、全く違った感慨があるでしょう。少々涙ぐんでいます。



投稿コーナーのご案内

「青山学報」では、下記のコーナーで投稿を募集しています。
採用された方には掲載誌と記念グッズを進呈いたします。
皆さまからのご投稿をお待ちしております。

私の恩師

- テーマ 青山学院で教わった懐かしい恩師について、その思い出をエッセイにまとめてください。
- 応募資格 校友、在校生、教職員。
- 応募規定 文章…タイトル 30 字以内、本文 400～1000 字程度。※書式自由。
写真…1～3 点以内（なくても結構です）。
◎住所・氏名・ご希望の場合はペンネーム（またはイニシャル）、連絡可能な電話番号・メールアドレス、その恩師に教わった当時の学校名（大学・女子短期大学の場合は学部・学科）・学年を明記してください。

思い出写真館

- テーマ 授業、行事、部活動、アド・グルなど、なんでも結構です。青山学院での思い出を、写真を中心にエッセイにまとめてください。
- 応募資格 校友、在校生、教職員。
- 応募規定 文章…タイトル 30 字以内、本文 400～1000 字程度。※書式自由。
写真…1～3 点。
◎住所・氏名・ご希望の場合はペンネーム（またはイニシャル）、連絡可能な電話番号・メールアドレス、当時の学校名（大学・女子短期大学の場合は学部・学科）・学年を明記してください。可能な限り、撮影年をご記入ください。

あおQ

- テーマ 青山学院にまつわる素朴な疑問などをお寄せください。
- 応募資格 どなたでもご応募いただけます。
- 応募規定 ハガキに疑問・質問を明記（字数・書式自由）。※紙幅等の関係で、文章・表現を編集させていただきます。場合がございませう。
◎住所・氏名・ご希望の場合はペンネーム（またはイニシャル）、連絡可能な電話番号・メールアドレスを明記してください。

写真について

- 公序良俗に反しないもので、被写体の肖像権・所有権等に問題が生じないものをお選びください。
- ・写真データを保存した CD・DVD、または紙焼き写真（高精度のものならコピーでも可）をお送りください。
- ・写真データは、十分な解像度のあるものに限ります。Word や Excel などに貼り付けた写真は、使用することができません。
- ・紙焼き写真については、採用・不採用に関わらず受付後 1 年以内に返却いたします。必ず裏面に氏名を明記してください。
- データは、基本的には返却いたしません、一定の期間を置いて、責任を持って破棄いたします。
- ・郵送中の事故、万一の破損、汚損等が発生しても責任は負いかねます。ご了承ください。

投稿先

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25 青山学院本部広報部 青山学報[〇〇〇コーナー]係

- ※応募者多数の場合は、掲載号の検討や掲載作品を選考させていただくことがございます。
- ※応募規定を満たしていない場合は、掲載できない場合がございます。
- ※ご提供いただきました個人情報は、本部広報部で責任を持って管理し、各コーナーでの選考、連絡、写真の返却等以外には使用いたしません。
- ※掲載作品は青山学院が管理・発行するウェブサイトや他の印刷物に引用、転載させていただくことがございます。

優秀賞

- 川の中山女とぼくの大バトル
初等部2年 ■ 花田 慧
- 息止めてカニとぼくの一騎打ち
初等部6年 ■ 公文 敦也
- 夏休みほこりばかりのローファーよ
中等部1年 ■ 藤田 倅呼
- 雷に驚く猫の影を見る
中等部1年 ■ 松井 奇跡
- 夜に咲く花をのみこむ土用波
中等部2年 ■ 沼田 理紗子
- 妹の話かき消す蟬の声
中等部2年 ■ 真山 麗
- 慎重に山を崩してかき氷
中等部3年 ■ 福田 紗也

総評

初めての青山俳壇でしたが、たくさんご応募いただきホッとしました。たった十七音の俳句が表現できることはわずかでず。どう省略するか、何を削るか頭を悩ませてください。そして、省略し、削ったものを読み取らせるのが俳句です。皆さんの句からいろいろなことが想像できました。ご承知の通り、俳句は季語と定型がとてゝ大切でず。今回は「夏の句」がテーマでしたが、秋の季語だったり、季語が複数あつたりする句もありました。ほとんどの国語辞典には季語に季節が掲載されているので確認することをお勧めします。また、五七五の途中で一字マスを空けないように書いてください。たくさんのご応募、ありがとうございました。次回も皆さんの句をお待ちしています。

林 謙二

選者



榎 未知子
公益社団法人俳人協会理事、
同人誌「群青」共同代表、
2018年俳人協会賞受賞。



片山 由美子
公益社団法人俳人協会常務理事、
毎日俳壇選者、『香雨』創刊、主宰。
2013年俳人協会賞受賞。



林 謙二
中等部国語科教諭。俳人協会教
職員のための俳句指導講座委員、
俳句結社「葦」所属。



大屋 多詠子
大学文学部日本文学科教授。
父は俳人の大屋達治。
俳句結社「天為」所属。

「放課後819倶楽部」
「青山俳壇」と連動して中等部生と俳
句を学ぶシリーズ。ぜひご覧ください。



- 向日葵の輝く笑顔が並んでる
中等部3年 ■ 牧美佑
- かき氷一口食べればもう十分
大学理工学部化学生命科学科4年 ■ 大島 美優
- 制服の二の腕まぶし夏木立
校友 ■ 青木 俊子
- 木々の香をのこし夕立去りにけり
校友 ■ 上原 和子
- 街灯の小虫飛び交う夕薄暑
校友 ■ 久保田 泰史
- 噴水のてっぺんにある不安感
校友 ■ 遠山 忠彦